

第三十五 普通語に付て

落合直澄

私が今日演舌致します所は、今我々が常に使用する普通語の説なり、

此普通語は高尚語の轉訛と、字音と、方言と等より成立てありますが、今日は字音より出たる語と、方語とはさしおきて、高尚語の轉訛に係れる語を主として、其語の起源時代より演舌致します、

従前は古書に載せたる語を古言、或は雅言と稱し、古書に見えざるものをば、總て俗語と稱しました

然るに古書にも俗語があります、それは假名遣を誤り、或は語格を誤り、或は語尾を

訛て嬉しう、悲しうなど云ふが如き、是れは皆俗語と申さねはなりません、又現今使用する詞の中にも、正格に叶へるがあります、是れは雅言と云はねばなりません、

故に古今を以て、雅俗を分つことはなりません、之れに由て私は古書に載せて現今使用せざる語は古語と稱し、正格に叶へる語は古今に拘はらず高尚語、或は雅言と稱し、現今通用する語は普通語、或は後世語と稱し、下等社會に多く行はる、ペランメ語は勿論、上等社會に行はる、語といへども、

オホセラル、を、 オッシヤル

アラセラル、を、 アラッシヤル

と云ふが如き、卑劣なる語は、俗語と名けたく思ひます、私が今日普通語の演舌を致すは、社會に何の利益を與ふるか、と云ふに就て一言致しますが、先づ第一に萬國交際追々親密に成り、外人雜居と云ふ場合に至る時は、外國人の必用とするものは普通語でありませう、然るに普通語に規則がないと申す時は、外國人の不便は云ふに及ばず、規則のあるものを、ないと云ふは、我邦人の不親切に出るわけにて、我邦の耻辱でありませう、是れ第一に普通語を研究せねばなら

ぬ理由であります、第二に今日我正格なる古語を取て談話に用ゐることは、我邦言語學専門の人といへども成し得べからざる所にして、廣く内外人に利益を與ふことはできません、故に正格なる古言は高尚文に存して置き、普通語を以て文章を綴る方法を設けなば、如何なる無學者と雖とも意を解し得べく、又如何なる無學者と雖とも自由に文章を綴り得べし、然して之を高尚語格に比較して其格を訂正すれば、忽ち一の高尚文を作り出すべし、如此なれば、普通文の社會に利益を與ふると少々ならざるべし、さて我々が今日使用する言語は如何なる現則あつて彼我に通するか、如何なる言語を基として成立ち居るかを知らねばなりません、

此普通語格は、高尚語格より出で、終に一格を成したるものにて、如何なる無學者と雖とも知らず、其規則を踏み行くものにて、規則にはづれては言語が通じませぬ、元來我言語の法則は人の作意に出たるものにてはありませぬ、故に如何なる人と雖とも自然に規則を踏み行かるゝものにて、私は之を神定の規則、或は自然の法則と稱します、

この普通語格は何時の時代に起れるかと、其始めを探ぬるに、千二百年ばかり以前

より、そろ／＼と高尚語が現今の普通語と變化したるものと思はれます、其證は古事記に「哭伊佐知流」といふ語が一つあります、此語は高尚語格にては「イサチ、イサツル、イサツレ」と活く語なれば、イサツルと云はねば規則に叶ひませぬ、或人の説には「チとツは通音なれば、此知の字はツと訓みてイサツルなり」と云ふ説もあれども、古事記中に知字は甚多かれともツと訓みたる例はなし、されば「イサチル」と訓むに相違なし、此哭伊佐知流は紀元前の所に見えたれとも、決して此時代に在るべきことに非ず、かゝる例は他に一もなければ、古事記編纂の時に誤れるならんかと思はれます、光仁天皇の時沙門景戒の著せる日本靈異記に、鄙の註に「井南加比流、續日本紀詔詞に荒比流などあるも、同例にて、高尚語格には、キナカブル、アラブルと云ふべき格なり、假字違も、靈異記に一二見え、又申の假字はマラスなるを、萬葉集和名抄等にマウスに誤れり、然れとも萬葉集の語の規則に合ひて、假字の正く誤少きは、撰者の撰集に力を盡して、語調よきを取りたる故なるべし、され共此時代より、追々言文懸隔せしならむとは思はるれど、當時の普通語は傳はらされば知るに由なし、少し下りて貞觀十年に成れる神遺方等は、固より古傳に由ると雖ども、文學者の手に出ざ

る故に、當時の言文一致を寫し出せるものにて、假字違の多きは却て當時の普通語の狀を見るに足るべきなり、

延喜の頃紀貫之と云文學者出て、古今集土佐日記などを作り出たるが、最も古今を斟酌して中を取られたるものと見えて、歌文などに於ては、さまで耳遠き詞もなく、語格に合はさることもなし、唯文に於ては音便を用ゐ、言文の遠さからしめざるを勉められたり、此時の普通語は、土佐日記に船歌を載せて、手をきるくつんだる菜を云々とあるにて知るべし、ツンダル菜とはツミタル菜にて、今も菜をツンダと云なり、又夕をヨンベ、又古今集に后宮をキサイノミヤ、參でをマウデなどあり、文章にすら訛言を用ゐるを以て見れば、此頃は普通語は甚だ拙劣に陥りたるものなるべし、天曆の頃源順朝臣和名抄を撰述せり、其序に至りて和名弃而不屑とあるを以て、此頃言語學の衰頹、言語の紛亂を思ふべし、是れより下りて今を距ること六百五十六年前、定家卿の頃に至ては、言文彌遠隔し、音韻も亂れて比も伊も字も不も口調には分別しがたき故に、河内前司親行假名遣を著はして、定家卿の閱覽を経るに至れり、之を定家假名遣と云ふ、これを親行の孫行阿が增補しましたから、行阿假名遣と

も云ひます、然れとも其假字遣も十中の二は誤りてあります、是れより言文益々遠く、普通語格は今日と格別の違ひなかりしこと、知らるれば、沿革の次第は是れにて止めおきます、

さて現今は高尚語は更に廢滅せしかと云ふに然らず、普通語中に現存してあります、其中に爲る來るなど云ふ語は、今も昔も同じく、又人を敬て何々なされと云ことを、何々遊せ、何々遊さるなど云ふ語は、古事記に武内宿禰が天皇に御琴を進めて、御琴遊ばせといへるは語格も意も今に異なることなし、此類の語多かるべし、

又字音を我が語格に合せて活かすなどは、誰れ始めたりともなければどもおもしろきことなり、物語文などに裝束を活かしてサウヅキテと云類古くより多きことなるが、今日料理をリヤウラン、リヤウリ、リヤウル、リヤウレ、力を、リキミ、リキム可愛を、カアイガリ、カアイガル、執念をシブネキ、シブネク、乞食を、コジク、コジケなど云ふもおかし、武將感狀記に「破れ笠身にはとり着てこじくとも天の下にはみのはたのまじ」と云ふ歌あり、是れは本多美濃守の儉約を誹りたるなり、ミノはたのまじは美濃守に當てたるなり、

如此字音を活かすは甚簡短にて、よき法なり、又日本語の體言を活かしたるも多く有ます、腹をハラム、雲をクモルと云ふ類、古へもあり、又今八重を活かして、ヤヘタ、ヤヘルなど云ひ、又近頃誰が云出したるか知らねと、確を活かして、タシカメル、タシカマリなど云ひます、最も古く宇都穂物語に見えましたやうに覺えます、又普通語と成りし後に變化するもあります、ゴザリマス、ゴザイマス、ゴザンス、ゴゼイス、ゴイス、ゴンス、ゲイス、ゲスの類か、る語も語源を探ねて明かにせねばならぬ、日本語に漫りに類似の漢語を當るは、混はしくて惡し、と云ふ語シカ、シカリ、と同一、サル、サテ、サハ、なども云ひ、サの通りとも云ひて、邦語なるを、左の字を當てたるより今は右に對して、用ゐること、なれり、セハシと云語は、セハシ、セマル、セク、など云語に通して、夫木集にせはしな、の世や、など歌にもある邦語なるを、世話の字を當てるより、字義より誤りて心得る者あり、俗語の如く聞えて俗語ならさるもの多し、メカスと云ふ語は、形つくるを云ふ語にて、本語はメクなり、古くキラメクを、キラメカス、ホノメクを、ホノメカス、ナマメクを、ナマメカスとも云ふに同じ、

生利と云ふ語は生意氣とも云ますが、ナマは、ナマ覺エ、ナマジヒ、ナマニエ、などのナマにて、古くよりある詞で、不十分なる義理にて、氣のき、たる狀をして、十分ならざるをナマキ、と云ふ、此利は口キ、目キ、足キ、手利などのキクにて、利字を當つべし、枕の草子にすぐろくうつにかたきのさいのキ、たるなどあります、藥がきく、酢がきく、辛がきく、釘がきく、氣がきくなど云ふキクも、元來同語であります、日本紀の利字の訓にカバとあるはキ、の轉なり、下野足利も同じ、耳には聞字を當て、キクと云ひ、キコユルなど、轉じ、鼻にはカグと轉し、嗅字を當つ、又此のカグと云語は、古今集に花橘の香をカグはとありて、古も今も更はることなきを香をキクと云ふ語は、今有て古へなし、されとも語源を探れば正格に叶へる語なり、是は鼻の作用なれども音をキクと云は、耳の作用にて同じきなり、

御字は至尊の御上に用る字なるを今は御字をおんと訓み、おん肴、おん菓子と、何事にも御字を添へますが、此おんと云ふは、先哲の説におんは大御と云ふ詞の訛なりと云て有ます、古へ大御酒、大御食と云語がありて、御字はミに當てたるものであります、今もオミ酒、オミ帶、オミ足、オミ裕、オミオ汁、オミオ膳、オミオ盆とも云ひまして、

オシはおほみの訛りに相違ないと思はれます、古今集におほんめぐみ御歌御時などに見えたれば、古くより訛りたるものなり、又オンをオとばかりも申して、オ菓子オ肴とも申します、又此御字をゴと唱へて御覽せられなど云ふことは、古今集源氏物語より、此方多く見えますが、是は全く字音と思はれます、然るに御字は吳音ゴにて、朝鮮音にてはオと云ふ故に、オもゴも字音のやうにも思ふ人も有ますが、ゴは字音オは訓と差別せねばなりません、現今は混淆してつかふことがあります、

高尚語は古代の言文一致の語でありますが、夫れとても實際の音と詞とは、少しは更はりたるやに思れます、譬へば古今集にやまやまて山ほとゝぎすことつてむとあるヤヨヤは今もヤア、或はヤイ、とか云ふ語で、呼かける詞なれば、昔しも實際は、ヤア、と云ひしならんと思はれます、夫れをヤヨヤと約めて云は、詞に作りたるならん、又物名で云へば、鶉の聲は今も昔もカーカーと鳴ならむが、萬葉集には子等來とぞなく、續詞花集今はカウとぞ音はなかれけるとありて、カラと云ふ詞に作りてカラスとは名けしなるべし、嘆息の詞は昔も今もアーと云へるならむを、アナに作り、ア、ヤレ、と云へるなども、アハレに作りて詞とせしなるべし、又今

笑聲を聞くにアイウエオとハヒフヘホとを合せて、アハ、イヒ、ウフ、エヘ、オホ、と云ひ、或はハヒフヘホの一行にてハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、とも云ひます、昔も今も笑聲などには更はりはなかるべきことなるを、昔はから、と打笑ひなど、笑聲を寫してから、と云ふ詞とせり、かく考へ行く時は、普通語を本として、古語に及ぼして、解釋を加へねばならぬことも有らうと思はれます、又アリマセウ、シマセウなど云ふマセウは坐すと云詞より出たり、此坐すと云ふ語は、イマサム、イマシ、イマス、イマセ、ともイマセ、イマス、イマスル、イマスレとも活く語にて、い。を省きてマセ、マスとも云ひます、坐奉など古くより云語にて、マセムのむ。をう。と轉じてマセウと申しまして敬詞とすることであり、マセムと云ふ詞は、宇都保物語にわが子のイマセンかたには云々など、有り、此んと云助辭に就て申しますが、ん。はぬ。或はむ。の訛りとは誰も知りたることなるが、上代は知ヌと云へば知らざること、知らむといへば知らんとすることにて、云ひ混る、ことは有りませぬ、又普通語にても知らんと云へば知らぬこと、知うといへば知らうとする意にて、言語上にては能く別つて有ますが、之を文章に書く時は知らぬにも知らんと書き、知らう

にも知んと書くことが有りて、やゝもすれば間違ひます。高尚文に書くときは又とムと差別をして正く書くがよし、普通文に書くならばンとウと言文一致に書くがよからうと思はれます。併し言文一致ならば、知ロー、行コーと書ねばならぬなれども、さすれば高尚語の原語に遠くなり、且つ世人も知ラウ行カウと書きますから、此の方がよからうと思はれます。又

行ムは	行ウ	有ムは	アラウ	勝ムは	カタウ
ユカヌは	ユカン	アラヌは	アラン	カタヌは	カタン
見ムは	ミヨウ	着ムは	キヨウ	養ムは	ニヨウ
見ムは	ミン	着ヌは	キン	養ヌは	ニン
起ムは	オキヨウ	落ムは	オチヨウ	老ムは	オイヨウ
起ヌは	オキン	落ヌは	オチン	老ヌは	オイン
受ムは	ウケウ	當ムは	アテウ	座ムは	マセウ
ウケヌは	ウケン	アテヌは	アテン	マセヌは	マセン

と云ふ格であります。が受ケムをウケウと云ふべきを延べてウケヨウ、當ムをアテ

ウと云ふべきを、アテヨウとも云ひます。此例に準て見ムをミウと云べきをミヨウ、起キムをオキウと云ふべきを、オキヨウト云は語路のよき方に自然變化したるものと思はれます。爲ムをセウとも、シヨウトとも云ひます。是は此セウか此シヨウかと云ふと同例であります。普通語は高尚語より出たるものなれば、其規則も甚しく相違する譯にてはありませぬ。前にも申す通り、起クルをオキル、受クルをウケルと云ふ類書キテをカイテ、指テをサイテ、勝テをカツテ、買テをカウテの類。是は西國にてはカウテ、東國にてはカツテと云ひます。西國にてカツテ來ルと云ふことは、東國にてカツテクルと云ふ。是れは東國は高尚語にて正しけれども、カフことをカツテクルと云は、西國のカウテ來ルと云ふ方が、音便ながらも宜しからうと思はれます。夫れはともあれ、是等の音便の一格が高尚語と相違する所にて、助辭の連續に至ては、普通語に行クケレドモ、見ルケレドモ、受クルケレドモなど、ケレドモを思よらぬ所に付くるが、高尚語と相違する所にて、甚だめづらしく思はれます。此他にも相違する所が少づゝあります。

書タ見タのタは高尚語の書ッ見ッ、書タリ見タリなどの轉訛と思はれます。併し其

用ゐる狀は、書し見しなど、云ふべき處に多く用ゐてあります、其所に由りて、ツタリシなどの高尚語に返すことを得べし、又ワイと云ふ語は書ワイ、見るワイなど、多く用ゐる普通語であります、是は高尚語にはハヨ、ハヤなど云へる語と思はれます、神武紀に伊弉波豫伊弉波豫とあります、此ハヨをワイと訛りしものと思はれ倭建尊のあづまハヤ、拾遺集にかへり見しハヤ、六百番歌合にかゝりさすハヤなどあるも同語と思はれます、現今助辭のハ字を書て普通語にはワと唱へますが、此類は強て言文一致にしてワ字を書くは悪ろかるべし、買ワん買ワうも同例なり、さてこゝに普通語格圖を掲げて御覽に入れます

普通語格圖

四 段 用 語				
第一 段	大 過 去	居 體	續 用	取 買 嚙 死 勝 推 行
第二 段	同 上	同 上	同 上	リ イ ミ ニ チ シ キ タ ア マ ナ タ タ テ マ ソ ス サ ク イ フ バ ル
第三 段	小 過 去	命 令		ツ イ ツ ウ ン ツ イ イ ダ デ タ テ レ エ メ ネ テ セ ケ 命 令 ヨ ド バ
第四 段	現 在	截 斷	續 體	ル ウ ム ス ツ ス ク カ ワ ナ ヨ ダ ナ ケ ト ガ ノ ニ ラ イ 〇 〇 〇 〇 シ マ カ ゴ ジ ナ イ 〇 〇 〇 〇
第五 段	未 然	將 然		ラ ワ マ ナ タ サ カ ナ ズ チ ン ウ ク

[illegible]

第一	第二段	第三	第四
受 辭 例	受 辭 例	受 辭 例	受 辭 例
起 オキテ オキタ	起 オキレハ オキレヒ	起 オキルノ オキルヲ オキルハ オキルト オキルケレトモ オキルザヤ オキマイ アノ人モミルシノ人モミルシ	未 オキウ オキヤウ オキン オキネバ オキズ オキナクテ オキナイデ オキマイ
居 體 例	見 ミレバ ミレトモ	截 斷 例	將 然
似 顔 ウラミ 恨 アサオキ 朝起	石ガオチル 人ガウラミル 衣ヲキル 着	續 體 例	命 令
續 用 例	ミルヒト 見人 オキルトキ 起時	命 令	起 オキヨ オキロ
起 オキアガル			

下 一 段 用 語

第一	第二段	第三	第四
得 受 失 當 寢 經 留 荒	去 過 小 過 去	現 在	未 然
大 過 去	居 體	截 斷	將 然
續 用	續 體	續 體	命 令
エ ケ セ テ 子 ヘ メ レ	エ ケ セ レ テ 子 レ ヘ メ レ	エ ケ ル ガ ノ ニ ハ ヲ モ レ ト モ ナ レ ダ ナ ケ レ ト モ ナ ヨ ダ ナ カ イ シ	エ ケ ル ガ ノ ニ ハ ヲ モ レ ト モ ナ レ ダ ナ ケ レ ト モ ナ ヨ ダ ナ カ イ シ
テ タ イ タ ク ナ サ ル マ ス ア ソ バ ス タ マ フ	バ ド	ヲ ハ ヲ モ レ ト モ ナ レ ダ ナ ケ レ ト モ ナ ヨ ダ ナ カ イ シ	ウ ン 子 ズ ナ ク ナ イ マ イ ヨ ー 命 令 ロ ヨ ロ

四 段 變 用 語					
	爲	來			
第一 段	大過去	居體	續用	シ タマフ マス ナサル タク タイ タテ キ	
第二 段	小過去			スレ クレ ドバ	
第三 段	現在	截斷	續體	スル クル シワイ ナ□ ヨ□ ダ□ ナト ガラ ガノニ モハヲ ナレ チヤ□ ゾ□ カ□ カラ□	
第四 段	未然	將然	命令	セ 命令 〇〇 ヨ 〇〇 ン ネ ズ ナク ナイ マイ ヨ ー	

助辭ノ連續大凡前三全シ
但シ將然ノシヨ一命令ノシロ、コーヨ、セーヨナドニ於テ聊異ナリ

行推勝死嚙買取 カ サ タ ナ マ ワ ラ レ、レル、レレ、 セラレ、セラレル、セラレレ、 セ、ス、セル、セレ、	着起掘似下見恨銘老下 キ ジ ニ ヒ ミ イ リ ラレ ラレル ラレレ サセラレ サセラレル サセラレレ サシスセ ラリルレ
下一段用語 他ニセラレル ユカレ ユカレル ユカレレ 敬詞 他ヲセシメル ユカセ ユカセル ユカセレ 同上 ユカセラレ ユカセラレル ユカセラレレ	下一段用語 他ニセラレル オキラレ オキラレル オキラレレ 敬詞 同上 オキサセラレ オキサセラレル オキサセラレレ 六段用語 然スル オコサ オコシ オコス オコセ 自然 ガコラ ナコリ ガコル ガコレ

[illegible]

無	ナク	ナイ	レナケ
願	タク	タイ	タケレ
坐	マセ	マシマス	マスル マスレ
爲	ナサレ	ナサル	ナサレル ナサレレ
賜	ハ	イ	ウ ニ
遊	サ	シ	ス セ
	ハサレ	ハサル	ハサレル ハサレレ
敬詞	ユキマセウ	ユキマシデ	ユキマス ユキマスレ
小敬	ユキナサレデ	ユキナサル	ユキナサレル ユキナサレレ
大敬	ユキタマワシ	ユキタマイナ	ユキタマウ ユキタマエ
自然	オカキアソバサウ	オカキアソバシデ	オカキアソバス オカキアソバセ
	オカキアソバサレ	オカキアソバサル	オカキアソバサレル
助辭格一斑			

未 然		已 然		已 然		已 然	
ナラバ		ナレ		ドバ ドモ		ネ ドバ ドモ	
シ		デニ		ゾヨ ノ		カカンデ カカンニ	
スノ轉訛		ハト ケレ		カヨ リカラ ナレ		カカシ ナレバ カカンケレ	
テ		シタ シノ義		デニ ハト ケレ		ゾヨ カヨ リカラ ナレ	
ヨ		見テヨ		見テヨ		見テヨ	
合		ニワニモ ノガノヲ ノモ ノハ ノニ ノカ ノニハ		コノ類甚タ多シ		コノ類甚タ多シ	
助		ノヨトモ トハ トヲ トカ トヨ ドモ ヲモ		コノ類甚タ多シ		コノ類甚タ多シ	
辭		ヲバヲヨ デモ デハ		コノ類甚タ多シ		コノ類甚タ多シ	

コノ普通語格圖ハ、予カ近頃製レル者ナリ、世ニモカ、ル者ヲ製シモノアリヤ、私ハ未タ之ヲ聞キマセヌ、コハ固ヨリ完全セシモノニ非ラス、ヨロシク諸賢ノ訂正ヲ願ヒマス、